

特集論文

新学習指導要領における「基礎学力」の位置付けと 小学校における授業改善

Report on the definition of "Basic Knowledge" in New Course of
Study and the method of improving lessons at elementary schools

深澤 英雄

FUKAZAWA Hideo

(和歌山大学教育学研究科教職開発専攻)

受理日 平成 30 年 1 月 27 日

抄録:新学習指導要領においては、2030 年という将来を見据え、進行する社会の構造的な変化への備えを解いている。子供たちに知・徳・体にわたる「生きる力」を育むことを目指し、人生や社会を切り拓いていくために必要な資質・能力がバランスよく育まれるよう、学校等段階間や教科等間のつながりを見通した教育課程編成し、「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成の両方を求めている。本稿では、基礎的・基本的知識の習得の学校全体での取り組みを事例に、「基礎学力」の位置付けと授業改善について論じる。モジュールタイムを使い、計画的に基礎的、基本的知識の習得することが、児童の学習意欲と授業の活性化の道筋にとって重要であることが示唆された。

キーワード: 基礎学力、新学習指導要領、授業改善、読み書き計算

1. はじめに

今回の学習指導要領改訂は、2014 年（平成 26）年 11 月 20 日、中央教育審議会への「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問より開始された。その諮問文には、今の子供たちが成人して活躍が期待される頃の社会について、生産年齢人口の減少やグローバル化、技術革新により社会構造も大きく変化し、子供たちが就く職業の在り方についても様変わりするとの見方も示されている。

成熟社会を迎えた近未来社会においては、多様性を原動力にして、新たな価値の創造に参加・参画する営みが必要との認識を示している。2030 年という将来を見据え、進行する社会の構造的な変化への備えを解いたのが、今回の学習指導要領改訂である。

子供たちに知・徳・体にわたる「生きる力」を育むことを目指し、人生や社会を切り拓いていくために必要な資質・能力がバランスよく育まれるよう、学校等段階間や教科等間のつながりを見通した教育課程編成について明記している。

平成 28 年 12 月に公表された「中央教育審議会答申」で学力については、こう述べられている。『特に学力

については、「ゆとり」か「詰め込み」かの二項対立を乗り越え、いわゆる学力の三要素、すなわち学校教育法第 30 条第 2 項に示された「基礎的な知識及び技能」「これらを活用して課題を解決するために、必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」及び「主体的に学習に取り組む態度」から構成される「確かな学力」のバランスのとれた育成が重視されることとなった。』と¹⁾ある。法律的に見直された「学力」概念においては、①基礎的・基本的な知識・技能、②知識技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、③学習意欲の三要素が主要な構成要素となっている。

本稿では、ここでいう「基礎的な知識及び技能」に焦点をあて、これまでの変遷を踏まえて改めてその定義付け及び教育現場での捉え方の実際について述べていくこととする。そして、「基礎的な知識及び技能」の習得について、その学習内容の充実度を維持しつつ、問題解決型の学力を伸ばしていくために必要とされる授業改善の方策について提案したい。

2. 学習指導要領における「基礎学力」定着の経緯

平成元年（1989）年告示の学習指導要領において、文部省（現 文部科学省）は「新しい学力観」を提唱した。そこでは、「記憶中心の知識偏重の教育」と対比すべきものとして、「自ら学ぶ意欲の育成や思考力、判断力などの育成に重点を置く」学力観が提起された。「新しい学力観」のもと推進されたのが、いわゆる「ゆとり教育」であった。学習内容の三割削減、授業時間の減少、学校週5日制の導入、科目横断型「総合的な学習の時間」の創設などを通して、子供たちに「ゆとり」を与える主旨であった。学習時間と内容にゆとりを作った上で、「総合的な学習の時間」を導入し、より生活に根差した問題を考える学習をより自由な発想を育む教育を目指した。

しかし、「ゆとり教育」に対して「学力低下」問題が指摘され、「ゆとり教育」については、文部科学省が次のような評価を下している。『「ゆとり」や子どもたちの自主性を強調するあまり、基礎的な学習が軽視されたり、「総合的な学習の時間」が学習活動ではなく、「遊びの時間」として受け取られるなど、新しい学習指導要領の考え方を誤解した扱いが一部になされているのではないかな等の指摘もなされております。』（平成13年1月24日 都道府県教育長協議会メモ 文部科学省）また、文部科学省大臣は、2016年5月10日に、2020年から始まる新学習指導要領に関し、学ぶ知識の量を減らさない旨を確認し「ゆとり教育との決別を明確にしておきたい」と発言している。

文部科学省の学習指導要領「生きる力」改訂の基本的な考え方には²⁾、まず『「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成の両方が必要』とされており、両者に優劣をつけることはしていない。そして、「基礎的・基本的な知識技能」つまり基礎学力の習得について重視すべき点として、次の2点がのべられている。

- ・「社会の変化や科学技術の進展等に伴い子どもたちに指導することが必要な知識・技能について、しっかりと教える」
- ・「つまずきやすい内容の確実な習得を図るための繰り返し学習を行う。」

この2つの項目からすると、つまり基礎学力というのは、指導者が児童に対して「しっかりと教え」、「確実な習得」を図るものであるということとなる。

また、「思考力・判断力・表現力等の育成」については、以下の2点を重視することが明記されている。

- ・「各教科等の指導の中で、観察・実験やレポートの作成など知識・技能を活用する学習活動を充実する。
- ・教科等を横断した課題解決的な学習や探求的な活動を充実する。

先に述べた「基礎学力」については、指導者がしっかりと教え、繰り返しながら確実な習得を目指すものであったが、更にその基礎学力を発揮する場（思考・判断・表現する場）を充実させて、いわゆる「問題解決型の学力」も伸ばしていくという方針と受け取れる。ここでは、文部科学省の目指す方向として、「二兎を追う」という意図がはっきり示されたといえる。

中央教育審議会答申にはこうある。

『2. 小学校 (1) 小学校教育の基本と、低・中・高学年それぞれの課題 低学年においては、その2年間の中で生じた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響しているとの課題が指摘されている。学習の質に大きく関わる語彙量を増やすことなど基礎的な知識・技能の定着や、感性を豊かに働かせ、身近な出来事から気付きを得て考えることなど、中学年以降の学習の素地を形成していくとともに、一人一人のつまずきを早期に見いだし、指導上の配慮を行っていくことが重要となる』³⁾と述べられている。

「一人一人のつまずきを早期に見いだし、指導上の配慮を行っていくことが重要となる」との記述があるが、この箇所だけでも実際の指導場面においては様々な検討が必要である。ここでいう「つまずき」とは何か、どういう状態であるのか、「早期」とはどの学年のどの段階であるといえるのか、「指導上の配慮」とは具体的にどういったものか等については、次項以降で具体的な事例を取り上げながら検討していきたい。

3. 「基礎学力」定着の取り組み

前項ではこれまでの答申や学習指導要領等から「基礎学力」に関する部分を抽出して、その意図するところを改めて明示した。そこで、本項では、この「基礎学力」を定着させるための具体的な取り組みについての検討をおこなってきたい。

現場の声として、子供の「基礎学力」の実態を語られるときにまずは、「計算の誤答が多い。4年からの計算につまずく子供がいる。」「漢字が書けないことで学習意欲がない。」「本がすらすらと読めない。」という事が挙げられる。

「主体的・対話的で深い学び」ができるようになるには、基礎としての読み書き計算の理解と習熟がまずは求められる。「基礎学力」である「読み書き計算」の力を底上げをして、「主体的・対話的で深い学び」へとつなげるという両面作戦が重要になっている。

「基礎学力」を伸ばす実践は、クラスや学年で行われることは多いが、学校全体で取り組む報告は少ない。そこで、本研究は、学校ぐるみで、「基礎学力」を伸ばしている学校の事例を通して、基礎から応用への授業改善の道筋を検証したい。

4. B 小学校の事例

4.1. 概要

基礎学力向上の取り組みについて典型的な事例として A 県内の B 小学校の実践をあげる。B 小学校は、A 県の中央部に位置し自然環境に恵まれた地域。児童数 745 名、各学年 3～4 学級の中規模校。地域の協力にも恵まれ PTA 活動も大変盛ん。学校の取り組みとして「学力向上プロジェクト」「生活改善プロジェクト」「なかまづくり推進プロジェクト」の 3 つの柱を立て取り組んできた。2006 年度より週 3 時間の「モジュール学習」を取り入れ、読み・書き・計算等の基礎学力向上にも力を入れてきている。

4.1.1. 学力実態

B 小では、4 月当初の学力実態を把握するために全校で「到達度テスト」（資料 1）を実施した。「到達度テスト」とは、1 年生から 6 年生までの計算と漢字を各学年十問ずつ作成したものである。「到達度計算テスト」と「到達度漢字テスト」の 2 種類である。1 年から 6 年の問題を合わせると 60 問になる。

4 月の第 1 回到達度テストは、前学年の問題なので 6 年生なら、1 年から 5 年の 50 題を実施した。

6 年生の結果から述べる。6 年生は漢字については二極分化傾向にあり、平均すると 70% となるが、極端に点の取れない層と高得点の層が大きく離れている。

計算力も同じ傾向にあったが、漢字ほどの乖離はみられない。この乖離については、学級間の取り組みや意欲の差、学習の積み重ねの差が大きく出ているとみられる。

到達度テストから、どこの学年のどの問題からできていないのかを分析する。できていない箇所を「つまずき」と定義する。計算においては、4 年生のわり算から誤答が急に増えてくる。この「つまずき」は 3 年生で学習する、一桁の「わり算」の習得が十分でないことが起因する。到達度テストでは、わり算の問題をすべて網羅してはかることができないので、わり算については、別途わり算の定着度をはかるためのわり算テストを実施し、どの問題ができていないかを把握する。（資料 2）

4.1.2. 全校で取り組むモジュールタイムについて

B 小では毎週月・木曜日の 1 校時目を「モジュールタイム」と呼び、45 分の授業時間を 15 単位の 3 つに分けて、それぞれ「読み」「書き」「計算」に集中的に取り組んでいる。

モジュールタイムの目的は、①やる気の促進②基礎学力の向上③良い学習習慣と学習規律の確立である。B 小の子供たちの学力向上を目指す上で、まずは学習

の基本となる力をしっかりと定着させることと「話をきちんと聞き取る」「目的を明確につかむ」「時間を意識する」「落ち着き集中して作業する」等の良い学習習慣を身につけさせることを柱としている。こうした一人一人が持つ力を引き出した上で「子ども同士の学び合いや高め合いのある授業いかにして作り出していくのか」を当該年度の最重要課題としてきた。

「モジュール学習」と日々の授業を結びつけ、授業の活性化をはかり子供たちの生き生き活動する授業を追求すること目指していた。

4.1.3. 研究内容及び実践事例

(1) 研究の内容

事例としてあげるのは、6 年生 4 学級の取り組みである。（2009 年度）

6 年生の児童の学習規律および生活規律は 4 月当初から大変困難な状況であった。学習用具の準備、学習意欲、立ち歩きや私語が絶えず続く状況の中で、本校が取り組む「モジュール学習」を実施した。「モジュール学習」を通して学習習慣を身につけ、基礎学力の定着をはかること、授業内容をすべての児童が参加し理解できる内容に改善することにより、落ち着きを取り戻し、本来の学習意欲と学力の向上を取り戻せるのではないかという仮説を立て継続的な取り組みを行ってきた。

(2) 研究の進め方「モジュール学習の概要」

①「基礎学力」定着のための「小テスト」（資料 3）を実施し、一人一人の弱点を把握すると同時に、スキルアップを目指してきた。

②音読並びに経過学年にさかのぼっての漢字・計算の定着をはかる。

※各学年共通の『国語わくわく音読の森』（資料 4）を作成し 6 年間活用する。

③すべての児童が学力格差に関係なく取り組める「カルタ活動」を取り入れ意欲の向上をはかる。

※1 年 2 年『ことわざカルタ』3 年 4 年『百人一首』5 年『都道府県カルタ』6 年『歴史人物カルタ』『世界地図カルタ』

④毎月 1 回の検定テスト（資料 5）を行い、児童の学力実態を適時正確に把握し、指導のポイントを明確にする。

(3) 実践事例

1 「モジュール学習」の取り組み

「小テスト」は、漢字 20 問・簡単な算数（計算）・社会科の基礎的事項を A4 用紙に必ず入れ、定着をはかってきた。計算と社会については、終了後正解の確認と「つまずき」の原因を取り上げる。間違いが多い問題については、一斉に指導し、なぜ、つまずいたの

かを考えさせたり、説明したりする指導を行った。間違いの頻度の高いものは繰り返し出題し、同じ間違いをしないことを重点に指導を行ってきた。

音読は詩や百人一首、ことわざ、漢字など、次のカルタ活動に生かせるものも取り入れながら暗唱できることを目指して取り組みを継続した。当初は声を出すことにも自信のなかった児童であったが、次第に意欲や自信もみられるようになった。暗唱する分量を子供たちの実態に合わせて、最初は少なくすることで2週間の取り組みで暗唱もできるようになった。そうすることでだんだんと長い文章の暗唱もできるようになってきた。与える漢字については、当該学年の6年の漢字だけでなく、つまずきが多くみられた4年の漢字にさかのぼって復習を繰り返した。「面積」と「業績」。「覚」と「賞」の「かんむり」の違いなどの誤答が多かった。間違いやすい漢字を「小テスト」の問題に取り入れながら指導することを欠かさず行ってきた。

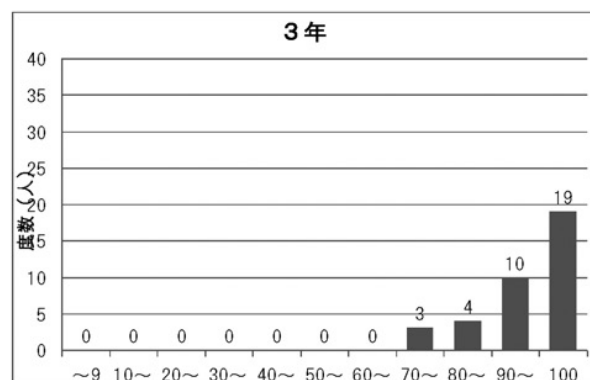
わり算の「 $\div 2$ ケタ」5年の小数のわり算「余りのあり」および「概数の処理」は誤答率が高い問題である。こういう問題については、一定の時間をとって、もう一度説明したり、小テストの中に問題を出すようにした。5年の問題の基礎となる4年の問題や、四捨五入など、5年の問題を解くために前提の力を養う問題も小テストの中に盛り込んだ。

③「カルタ活動」では、漢字の部首・ことわざ・歴史の人物・都道府県・百人一首を行ってきた。暗唱を通して身につけた力が、努力の成果としてカルタの対戦をととして実感できること、ルールに則って進めることで学習がより楽しく取り組めることを学んだ児童は、生活規律や学習規律にも改善をみせるようになった。

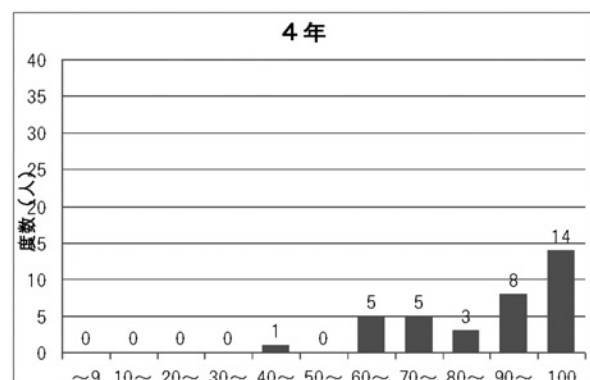
④検定テストでは「漢字」と「計算」を1年生までさかのぼってつまずき箇所の発見に努めてきた。到達度テストで、各学年の全体的な傾向はつかめるが、すべての問題を網羅することができていないので、検定テストの中に到達度テストでは、はかることができなかった問題を入れるようにした。

その中で見えてきたのは、学習規律や生活規律に欠ける児童に共通した傾向があることで、以下の3点を指摘することができる。

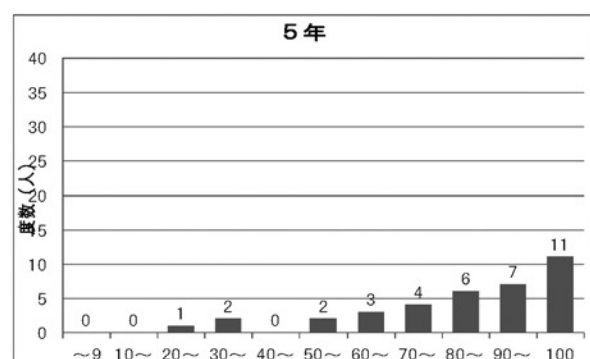
- ・漢字については2～3年生の頃から誤答率が高くなり、4年の漢字については50%に達しないので、当該学年の漢字には取り組む意欲が下がる。
- ・計算については「百マス計算」などの基礎計算には取り組むが、くり下がりのあるもの、わり算の筆算などになると、手が止まることなどから、商の立て方や困難と感じた時に計算を投げ出すことなどである。
- ・このため検定テストの学級の学力分布は下記のように対象テストの学年が上がるにつれて、望ましいJ曲線から中央が高くなるA曲線そして上位と下位に分



①望ましいJ型



②中央が高くなるA型



③上位と下位に分化するM型

《5月検定計算力テスト3年～5年の分布の変化》

化するM型へと次第に二極分化傾向を強めていることである。

2 課題のある児童へのはたらきかけ

C君は、昨年度の登校日は120日。しかし、ほとんど教室には入ることができず保健室で過ごす毎日だった。一時間から二時間の遅刻、そして給食前の早退など、学級の児童の中で学習することができない状態が続いていた。朝の出欠で姿が見えない時はすぐに自宅に電話を入れて登校を促し教師が迎えに行く。登校したら担任が保健室に行って様子を確認する。見計らって、学級の子供たちが誘いに行くことを続けた。

C君には、学級での学習・生活のリズムをつくるた

め「朝の会は何をする。一時間目の国語の最初はカルタ、次は漢字そして音読。二時間目の算数の最初は計算、それが終わったら教科書の内容の勉強。」と一日の流れを書いたプリントを渡して、見通しをもって学校生活が送れるようにした。「1時間目は何するのだった?」と問いかけにすぐに答えられるように指導した。

最初は、休み時間に姿を見せるだけだった。翌日は十分間だけ国語で過ごせた。次は一時間、そして、二時間。このような繰り返しの中で午前中教室で過ごせる日も増えてきた。この取り組みで4月の欠席は4日、5月は3日、昨年度の欠席日数を大幅に減らした。元氣よく登校し、教室で過ごせる日が増えた。

一学期当初は休み時間になると「切れる」「手が出る」「暴言をはく」など、数え切れないほどの「問題行動」を繰り返していたA君ですが、少しずつ素直に話を聞き、謝りにいく姿をみせるようになった。遅れがちな学習への意欲はなかなか進まなかったが、教師が家庭での学習のために手渡したカードを「先生、昨日は漢字を覚えるのにカードを使った。」「計算カードでわり算をやってみた。」など家庭で少しずつ取り組んでいる様子を伝えてくれるようになった。

4.1.4. 実践事例の成果と課題

子供たちのつまづきを明確にし、適切な指導を繰り返す中で子供の学力の向上に大きな進歩がみられるようになった。当初見られた学力格差も「小テスト」や「カルタ活動」を通して指導の困難さも落ち着きを取り戻した。新しい個々の課題にも取り組めるようになってきた。「モジュール学習」の成果が子供の生活規律や学習規律並びに基礎学力の向上にもつながり、授業の中でも少しずつ自信をもって参加できるようになってきた。

1年～6年の検定の成果と課題

①計算力テストについて 2009年度（4月・5月・6月・10月・11月・2月）に1年～6年のすべての学年で検定テストを実施し、計算力の定着と向上を図ってきた。6回の検定テストを実施し、計算力には大きな伸びが見られたが、同時に課題も明確になってきた。

成果はどの学年にも共通して以下のことをあげることができる。

- ・どの学年も概ね80%の到達度となり、平均点でみると大きな成果が見られる。
- ・4年の問題から漸次低下傾向がみられ、わり算、くり下がり計算等に重点的な取り組みが求められる。
- ・平均点だけでは一見十分な到達と判断しがちであるが、各学年別対象テストの学力分布のグラフをみると、3年生から次第にL曲線またはJ曲線がくずれている。
- ・個人差の格差が次第に広がり、J型からA型、そしてM型の傾向をしめしている。

4月当初に行った「計算到達度テスト」結果
3年～5年の計算の学力分布の例（1、2年は略）
（※4学級のうち1学級を例示）

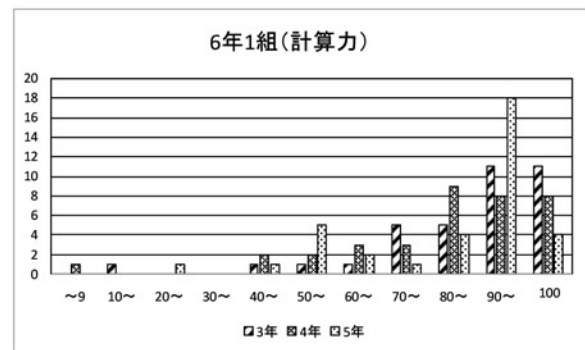


図1 計算到達度テストにおける3年時・4年次・5年次の得点分布

・いずれの学級、学年においても概ね同じ傾向がみられ、この個人格差の拡大を今以上大きくならないようきめ細かな個別指導並びに授業改善が求められている。

・「くり下がり計算」「わり算÷ケタが大きい問題」「小数のわり算」等の誤答率が高く、正確な計算力を高めていかない限り、この傾向の歯止めはさらに広がると見られ、重点的な指導が不可欠である。

②漢字検定テストについて（※4学級のうち2学級を例示）

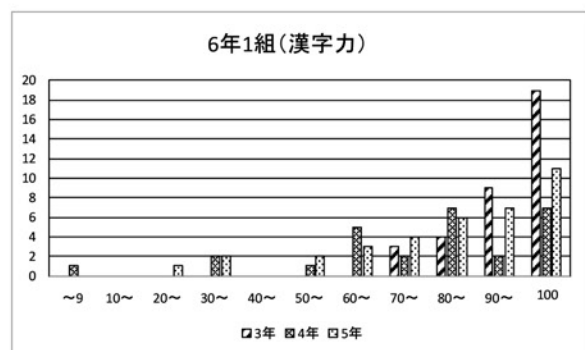


図2 漢字検定における3年時・4年次・5年次の得点分布

・5年生の問題は高い定着傾向がみられる。前年に学習しているので想起しやすいと考えられる。3年・4年生問題から80%を割る傾向がみられ、漢字についてはいっそうの達成が求められている。

・漢字の履修数が増え、熟語の数、概念や抽象語の増える中学年から定着を十分に行っていく必要がある。

・漢字については、計算力以上に個人差の拡大傾向が大きく、定着率の高い児童と低い児童の格差が大きい

傾向にある。2年生からほとんど書けないまま上の学年に上がっていくと考えると、中学年に続く高学年への学習規律「荒れ」の課題として職員全体でしっかりと、把握し、全員で方向を定め、定着に向けた取り組みの改善が必要である。

- ・計算力に比べて、J型からA型、M型のくずれが早く、次年度の課題として、再度定着・習熟を学校全体で取り組まなければならない。
- ・課題が明確になると同時に、達成度も明確になっているので、継続して自信をもって取り組むように児童へはたらきかけてきた。

5. 結論

B校の「基礎学力」定着の取り組みには、特徴的な点が3つある。

1つ目は、学校ぐるみで「基礎学力」定着の実践を行っている点である。「基礎学力」定着の取り組みは、担任や学年での実践に留まっていることが多い。学校の実態を教師で共有し、共通理解をはかり、教育課程を編成し、週に3時間15分のまとまった時間を「基礎学力」向上に充てている。

朝の会の後の「モジュール」が15分（月～金）と毎週月・木曜日の1校時を「モジュールタイム」と呼び45分の授業時間を15分単位の3つに分けて、週2時間とっている。「モジュール」では「読み書き計算」に集中的に取り組んでいる。

2つ目は、PDCAサイクルに従った実践であるという点である。Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）の4段階をきちんと踏まえて、繰り返している点である。

4月当初に全学年までの計算と漢字の到達度テストをし、その結果に基づいて、「モジュール」の計画を立てている。それを実行し、小テスト・検定テストなどで随時評価を加え、改善につなげている点である。3点目は、「モジュール」の目的を明確に示している点である。①やる気の促進②基礎学力の向上③良い学習習慣と学習規律の確立。

「モジュール」で「計算・漢字」ができるようになればいいという目的だけではなく、B小は「基礎学力」を「授業改善」の土台づくりにも目標を定めている。また、モジュールの学習内容を計画的にプログラムし、プリントなどの作成を担当まかせになっていないことでより効果が生まれている。

しかし、同じプリントをただこなしているのではない。到達度テスト、検定テストは揃えているが、小テストについては、担任が自分のクラスや学年の学習状態を把握して、問題の組み換え・補充などを行っている。子供の実態に即した、対応がなされている。

以上のように、B校では、モジュールタイムを通じ

て「基礎学力」（読み書き計算）の底上げをはかってきた。できることが自信となり、授業への参加意欲が高まったことが認められた。基礎的な学力の底上げはできつつあると考えられる。

しかし、「モジュール」を使った「基礎学力」だけの取り組みでは、「問題解決型」の授業改善になっていかない。基礎を前提にして、「主体的で対話的で深い学び」という問題解決型授業の志向をめざすという授業改善の道筋について、今後引き続き考察を続けることとしたい。

参考資料

- 1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成28年12月21日）
- 2) 文部科学省HP「学習指導要領「生きる力」改訂の基本的な考え」
- 3) 中央教育審議会答申「第2部 各学校段階、各教科における改訂の具体的な方向性
第1章 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続」

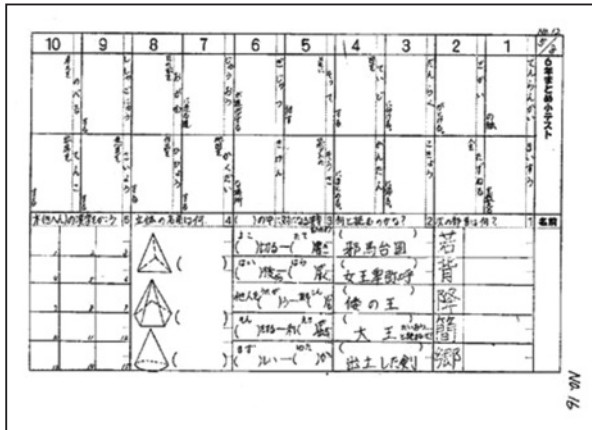
資料1「到達度テスト」

- 1年診断テスト①年組（ ）
けいさんしましょう。
- ① $3+4$
 - ② $6+7$
 - ③ $8+9$
 - ④ $6+4+8$
 - ⑤ $80+6$
 - ⑥ $7-2$
 - ⑦ $10-3$
 - ⑧ $14-8$
 - ⑨ $9-2+4$
 - ⑩ $67-4$

資料2 わり算プリント

17わり算の壁紙① 小から大の順				()分()秒()間			
① $10 \div 3 = \dots$	④ $12 \div 8 = \dots$	⑦ $20 \div 7 = \dots$	⑩ $25 \div 9 = \dots$				
② $10 \div 4 = \dots$	⑤ $12 \div 9 = \dots$	⑧ $20 \div 8 = \dots$	⑪ $26 \div 9 = \dots$				
③ $10 \div 6 = \dots$	⑥ $13 \div 7 = \dots$	⑨ $20 \div 9 = \dots$	⑫ $30 \div 4 = \dots$				
④ $10 \div 7 = \dots$	⑦ $13 \div 8 = \dots$	⑩ $21 \div 6 = \dots$	⑬ $30 \div 7 = \dots$				
⑤ $10 \div 8 = \dots$	⑧ $13 \div 9 = \dots$	⑪ $21 \div 8 = \dots$	⑭ $30 \div 8 = \dots$				
⑥ $10 \div 9 = \dots$	⑨ $14 \div 8 = \dots$	⑫ $21 \div 9 = \dots$	⑮ $31 \div 4 = \dots$				
⑦ $11 \div 3 = \dots$	⑩ $14 \div 9 = \dots$	⑬ $22 \div 6 = \dots$	⑯ $30 \div 9 = \dots$				
⑧ $11 \div 4 = \dots$	⑪ $15 \div 8 = \dots$	⑭ $22 \div 8 = \dots$	⑰ $31 \div 7 = \dots$				
⑨ $11 \div 6 = \dots$	⑫ $15 \div 9 = \dots$	⑮ $22 \div 9 = \dots$	⑱ $31 \div 8 = \dots$				
⑩ $11 \div 7 = \dots$	⑬ $16 \div 9 = \dots$	⑯ $23 \div 6 = \dots$	⑲ $31 \div 9 = \dots$				
⑪ $11 \div 8 = \dots$	⑭ $17 \div 9 = \dots$	⑰ $23 \div 8 = \dots$	⑳ $32 \div 7 = \dots$				
⑫ $11 \div 9 = \dots$	⑮ $20 \div 3 = \dots$	⑱ $23 \div 9 = \dots$					
⑬ $12 \div 7 = \dots$	⑯ $20 \div 6 = \dots$	㉑ $24 \div 9 = \dots$					

資料3 小テスト



資料4 音読集



資料5 算数検定テスト

5年11月検定テスト 年 組 ()

1 つぎの面積を求めましょう。

① ② ③

式 式 式

答 () 答 () 答 ()

④ ⑤

⑥ $\frac{1}{7} + \frac{7}{8} =$

⑦ $\frac{5}{8} - \frac{1}{6} =$ ⑧ $2\frac{2}{5} + 3\frac{7}{10} =$

⑨ $7\frac{1}{9} - 3\frac{5}{6} =$

⑩ 事典 6 さつの重さをはかったら、10.8kg ありました。事典 1 さつの重さをは、平均何kg で
すか。
(式) _____ (答) _____

漢字検定プリント

武 146	減 141	資 136	衛 131	婦 126	十一	永 121	技 116	現 111	寄 106	銭 101	十一
犯 147	適 142	修 137	状 132	均 127	月	久 122	財 117	編 112	句 107	能 102	月
演 148	肥 143	因 138	境 133	術 128	年	券 123	留 118	率 113	舌 108	属 103	年
制 149	往 144	製 139	富 134	測 129	名	當 124	祖 119	刊 114	構 109	再 104	名
酸 150	復 145	統 140	精 135	布 130	前	妻 125	罪 120	興 115	述 110	夢 105	前

武 146	減 141	資 136	衛 131	婦 126	十一	永 121	技 116	現 111	寄 106	銭 101	十一
犯 147	適 142	修 137	状 132	均 127	月	久 122	財 117	編 112	句 107	能 102	月
演 148	肥 143	因 138	境 133	術 128	年	券 123	留 118	率 113	舌 108	属 103	年
制 149	往 144	製 139	富 134	測 129	名	當 124	祖 119	刊 114	構 109	再 104	名
酸 150	復 145	統 140	精 135	布 130	前	妻 125	罪 120	興 115	述 110	夢 105	前